総括

古瀬　奈津子

平安貴族社会については、近年、日本史、日本文学の両分野で新しい研究が進展している。日本史においては、平安時代の儀式書や『御堂関白記』『小右記』など貴族の日記の解読が進み、平安時代史についての基礎的理解が深まってきた。また、従来のような政治史や社会経済史ではなく、社会史的な視角が重視されるようになり、人と人との具体的な交流のあり方に関心がもたれるようになってきたことも指摘できる。日本文学においては、私家集についての研究がめざましく進展して、貴族や官人らの生活や人間関係、文学について通説とは異なる新しい成果が公表され、注目が集まっているところである。

本分科会では、このような研究状況に鑑み、日本史、日本文学における近年の新しい研究動向をネットワークという社会史的な視角のもとに紹介し、歴史学と文学の分野における学際的共同研究の可能性をさぐることを目的とした。

東海林亜矢子報告においては、正月二日に行われる中宮に対する拝礼と饗宴の儀式である中宮大饗をとりあげ、その成立時期を国母の時代が始まる中宮藤原穏子の時とした。中宮大饗は毎年正月に中宮との君臣関係を確認するという機能を有するが、中宮への拝礼は内裏殿上人が行っているのに対し、東宮への拝礼は東宮殿上人のみが行うなど、中宮・東宮との君臣関係には違いもみえ、今後の研究の進展が望まれる。

野田有紀子報告においては、平安貴族社会における行列をとりあげ、行列の構成や見物からうかがえる人間関係や社会的な関係について考察を行った。叙位や任官に預かった貴族らが礼を述べに行くための慶賀行列について、摂関家子弟の場合は家司や家人が中心であるが、非摂関家の場合は親族が中心となる。十世紀後半以降、東宮や摂関の行列や天皇の御禊行幸は、位階や官職から日常的に構築された個人的な関係を中心に構成されるようになり、行列する側だけでなく、見物する側にも変化が表れ、行列がイベントへと展開したと指摘した。行列は新しい視角の研究テーマで、今後の研究が期待される。

田中恭子報告は、平安中期の儒学者として著名な大江匡衡の和歌をとりあげ、匡衡集の和歌の中には梵網経を典拠として作られたものもあり、儒者としてだけではなく、仏教や和歌にも造詣の深い文化人としての匡衡の多角的な面を紹介した。また、近年出されている、匡衡の子挙周の母は赤染衛門ではなく、匡衡集において和歌を贈答している中将尼であるという新説に対しては、中将尼の姉妹にあたる人物ではないかという新しい解釈を示した。

質疑応答は各報告後に、報告に関する基礎的事項の説明などを中心になされ、特に野田報告に対しては日本文学の研究者から活発な質問がとび、関心の深さがうかがわれた。分科会全体の総括はしなかったが、東海林・野田報告では、平安貴族社会が、朝廷における君臣関係、家司や家人と摂関家との関係、一家・一門といった親族関係などさまざまな社会的な関係から成り立っていることが明らかにされた。今後はそれらの社会的な関係がどのように構成されて平安貴族社会が成立していたのかということも問題となろう。また、東海林・野田報告が日本史からの報告であったのに対し、日本文学からの報告であった田中報告からは、歴史史料ではわからない大江匡衡の文化人としての別の姿をうかがうことができ、大変興味深かった。日記などの記録からは貴族・官人の社会的な側面を把握することはできるが、私家集からは同じ人物のより日常的、個人的な側面が理解できるように思われる。このような史料的な特徴をふまえながら、共同作業を行うことによって、平安貴族社会についての理解をより豊かなものとしていくことができるであろう。